

今、教育委員は！

平成28年11月

教育委員 青柳 淳

本号のテーマ： 創造的文化活動を求めて

【アクティブラーニングについて思うこと】

アクティブラーニングということが言われます。「主体的な学び」と言い換えてもよいかと思います。なぜ、教育の世界において、そして新学習指導要領において、このことが強調されるようになったのでしょうか。それは、子どもたちや若者の主体性に対する危機感、主体性が衰えているのではないかという危機感が背景にあるように思います。

先日社会教育委員の皆さんと共に、子ども未来館を見学した際に、館長の“なおやマン”さんから、未来館を訪れる子どもたちの様子をうかがいました。“なおやマン”さんは、最近の子どもたちの様子で気になることとして、小さな子どもたちが、何かをやらうといっても、親の指示を待っていて、あるいは親の手伝いを待っていて、なかなか自分からやらうとしない、というお話をされていました。若者に対して指示待ち人間という批判がなされるようになって久しいと思います。若者だけでなく、小さな子どもたちまで指示待ち人間化しつつあるのでしょうか。

若者たちの1000人会議の活動、ボランティアへの参加などをみれば、けっして指示待ち一方ではないように思います。また、学校や児童館で活発に飛び回っている子どもたちの姿をみれば、けっして子どもたちの自主性や主体性が失われているわけではないように思います。

心理学の言葉で「解発」ということが言われます。人の持っている内在的可能性を引き出してやることを言います。たとえば、父性や母性は、人間に内在

しているが、引き出してやらなければ、人はそれを発揮できないということです。自主性や主体性は、子ども達や若者の中に内在しているが、それを引き出してやらなければ発揮できないということです。先回りして、大人が何かから何までやっていたのでは自主性は育ちません。しかし、逆に、ただほっておいたのでは自主性は育ちません。子どもが、料理のお手伝いをしようとしたり、掃除をしようとしたりしたときに、見守りながら、それを達成させてあげることです。

このように考えてみますと、子どもたちに自主性や主体性が無くなっているということではないように思います。子どもたちに本来備わっている自主性や主体性を、大人がうまく引き出してやっていない、ということのように思います。

【最近の行事から】

佐久市では、目指すべき将来都市像として『21世紀の新たな文化発祥都市』を掲げています。最近の行事の中から、文化の「発祥」を目指していると呼ぶのにふさわしいようなアクティブなことがらを取り上げてみました。

1 しんかいまこと 新海誠さんの講演

去る 11 月 5 日（土）、平成 28 年度図書館講座として、浅科の穂の香ホールにおいて、新海誠さんの講演が行われました。

新海監督が手掛けたアニメ映画『君の名は。』は、現在、国内だけでなく国際的にもヒット中です。

この講演の中で、新海監督は、『君の名は。』制作にかかわる秘密を話してくれました。新海作品の特徴は、佐久を思わせる美しい情景と光の扱い方の繊細さにあるとよく言われます。

それはこの映画でも、当然の前提となっています。さらに、『君の名は。』は、日本の伝統や文化をあちこちにちりばめながら、どこの国の人が見ても心を惹かれるわかりやすい物語になっているということです。



まず、第一に、少年・立花^{たちばな たき} 瀧と少女・宮水^{みやみず みつは} 三葉の出会いの物語があります。そして、第二に、三葉が、落下する彗星から、糸守町^{いともり}を救うお話があります。この二つの物語を絡み合わせながら、巫女^{みこ}の舞、織物、御神体に至る地形、“カタワレ時”という言葉などに、物語の展開を象徴する意匠を組み込みながらお話は進行していきます。最後に、青年・瀧と三葉は再会しますが、そこからはもはや別の物語ですから、映画はそこで終わりです。

聴衆の中には、小さな子どももいました。新海監督が気を遣ったように、講演は小さな子どもには少し難しかったかもしれません。でも、映画『君の名は。』は、幼児から高齢者まで、日本人から世界各国の人まで、その心をとらえています。その秘密は、『君の名は。』が、すべての人の心の中にある物語を刺激すること、すなわち、普遍的な物語性にあるということが明らかにされました。

2 こころのミュージカル『黄金^{おうごん}の郷^{くに}』

11月13日（日）、臼田のコスモ

ホールにおいて、市川^{ごろう}五郎兵衛^{べえ}を主人公とするミュージカルが行われました。

市川五郎兵衛は、戦国時代末期から江戸時代初期の人です。徳川家康の仕官の誘いを、「^{こころざし}志」す



に武に非ず、殖産興業^{しょくさんこうぎょう}にあり」として断りました。そして、人々の暮らしに目を向け、五郎兵衛新田などの新田開発に力を尽くしました。ミュージカルの中でも、そのことが中心的なテーマとして描かれています。

出演者は、公募で選んだ60人を含め、市民を中心として約120人に上ります。さらに、スタッフとして参加している方々を加えますと、多くの市民の皆さんが関わっています。

信毎に、年配の主婦の方が投書し、「出演者は、学業や仕事の間に練習し、合宿も行われたとのこと。苦労もあったと思いますが、一つのことに熱中し、

練習の成果を発表され、市民に楽しみと学び、夢を与えたことは、今後の生き方に大きな力となることでしょう。・・・このミュージカルを、これからも大切に地域で育てていかななくてはと強く思いました。」と述べています。

3 小中学生も参加して

11月19日(土)、信州“教育の日”実行委員会主催による全県的な行事、「信州“教育の日”」が、佐久平交流センターにおいて開催されました。その中で、「^{サクキッズ}SakuKids^{メディア}メディア^{セーフティ}Safety」の活動に関するシンポジウムが、松島主幹指導主事の進行で行われました。5人のシンポジストは年齢的には10代から70代、立場も様々で、議論の幅が広がりました。会場からの意見や感想もありました。望月小6年の^{はたぐちまお}口畠真緒さん、中込中3年の^{けいと}小林奎音君は、学校での議論、メディア機器に対する取り組みを報告しました。また、手元の資料を参考に、スマホやゲーム機対応をどう考えるか、^{もりかくまさし}角和士森さん・^{みやざわ}宮澤^{のりこ}則子さん・^{ゆたか}中沢裕さんといった3人の大人に混じって、自分自身の意見を述べていました。

小中学校でのアンケートや話し合いを通して、スマホやゲームに熱中することが、主に三つの大きな問題を引き起こしていることが明らかにされました。

- ① 生活リズムの乱れ
- ② 家族や友達とのコミュニケーションの欠如
- ③ ネットトラブル



畠口さんは対策を実行に移すことの難しさについて報告してくれました。小林君は、「テスト 3 日前にはラインを行わない」など、中込中のルール作りの取り組みについて報告してくれました。

「Saku Kids メディア Safety」の会長・森角和士さんから、組織立ち上げの経過のお話がありました。会の基本コンセプトは

- ① 押しつけではない
- ② 保護者・地域がともに取り組む

であり、最終目標は市全体の取り組みとすることである、ことが語られました。以上のように、全県的な行事の中で、「Saku Kids メディア Safety」の活動が報告され、関係者の議論が行われました。